九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

発達障害児のための集団心理療法「もくもくグループ」の検討 ： グループ参加者に対する予後調査

藤野, 正和
九州大学大学院人間環境学府

田中, 沙来人
九州大学大学院人間環境学府

遠矢, 浩一
九州大学大学院人間環境学研究院

針塚, 進
九州大学大学院人間環境学研究院

https://doi.org/10.15017/1448898

出版情報：九州大学総合臨床心理研究. 4, pp.11-17, 2013-03-29. 九州大学大学院人間環境学府附属総合臨床心理センター
バージョン：
権利関係：

Bulletin of Center for Clinical Psychology and Human Development, Kyushu University
Vol. 4, pp. 11－17.

発達障害児のための集団心理療法「もくもくグループ」の検討

― グループ参加者に対する予後調査 ―

藤野正和　九州大学大学院人間環境学府　／田中沙来人　九州大学大学院人間環境学府
遠矢浩一　九州大学大学院人間環境学研究院　／針塚　進　九州大学大学院人間環境学研究院

要約

本研究では，過去に集団心理療法活動に参加していた対象児・者に対して追跡調査を行い，現在の友人関係と社会的スキル・適応状況・精神的な健康度・保護者による子どもの社会的能力及び問題行動との関連を検討した。その結果，友人関係認識尺度とBDIとの関連において友人関係認識高群が友人関係認識低群に対し得点が有意に高いこと，友人関係認識尺度とKISSとの関連において友人関係認識高群が友人関係認識低群に対し得点が有意に低いこと，友人関係認識尺度とCBCLとの関連において「思考の問題」において友人関係認識高群が友人関係認識低群に対し得点が有意に高いことが示された。そのため，グループの中でいったんは友人関係に対し，ポジティブな印象をもったとしても，その後友人関係に関しネガティブな印象をもった場合精神的健康度は低くなる。今後は，卒業後に関しても友人関係に関し難しさを感じた場合に対応できるグループ設置の必要が示唆された。

キーワード：発達障害児・者，予後，友人関係，精神健康度

1．問題と目的

平成15年（2003）３月，「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」が出され，通常の小中学校に在籍するLD，AD/HD，高機能自閉症の児童生徒への教育的支援体制の構築について提言された。同時に，「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」の結果も示され，LD，AD/HD，高機能自閉症を含む特別な教育的支援を必要とする児童生徒が，約6.3%の割合で通常の学級に在籍していることが明らかになった。この子どもたちを，学習面，行動面の双方で著しい困難を示す領域で分けてみると，行動面に著しい困難を示す児童生徒が2.9%，学習面及び行動面の双方で著しい困難を示す児童生徒が1.2%であった。この数字は，医師や専門家の判断や診断によるものではないが，学校での指導において教師が強い行動コントロールの難しさを感じる子どもが少なくとも40人学級におよそ１～２人程度いることを示している。

九州大学大学院人間環境学府附属総合臨床心理センターでは，平成８年度から発達障害児およびその傾向が疑われ，対人関係において困難性を持つ児童生徒の発達支援のため，集団心理療法「もくもくグループ」を実践してきた（遠矢，2006）。しかし，グループの卒業後，適応状況について，十分な追跡的検討が行われてこなかった。近年，発達障害児において，思春期･青年期に差し掛かってくるにしたがい，社会的不適応から二次障害を引き起こす事が次々と報告されてきている。よって，本研究では過去に集団心理療法活動に参加していた対象児・者に対して追跡調査を行うことで，彼らの現在の友人関係と社会的スキル･適応状況･精神的な健康度・保護者による子どもの社会的能力及び問題行動との関連を検討することを目的とした。

2．方法

1）対象者

発達障害児への集団心理療法「もくもくグループ」に，過去1年以上の参加経験を持つ発達障害児・者26名を対象とした。対象者の詳細についてTable 1に示す。

2）尺度

a）KISS

KISSは，社会的なスキルを身につけている程度を測定する。社会的なスキルとは「対人関係を円滑にはこぶために役立つスキル（技能）」と定義されている（菊池, 1988）。Goldsteinら（1986）は，若者にとって必要な社会的なスキルを大きく6種類に分類した。すなわち，①初歩的なスキル，②高度なスキル，③感情処理のスキル，④攻撃に代わるスキル，⑤ストレスを処理するスキル，⑥計画のスキルである。この分類にもとづいてGoldsteinらが作成したスキルのリストをもとに，菊池（1988）が項目を作成した。したがって本尺度は，若者にとって必要な社会的なスキルについて測定することであり，上記6種類の社会的スキルを含んでいる。

b）友人関係認識尺度

友人関係認識尺度は，落合（1996），岡田（1999）らの友人関係尺度と榎本（1999）の友人関係の尺度を参考にして，寄与率60％以上のものを基準に，項目を抽出した。さらに，必要な項目について取捨選択を行い，計34項目を作成した。子どもには，仲良くしたいと思う学校の友人（一人でも，複数でも可）を想定し，その友人との付き合いについて，①今（現在）について「まったくしていない」から「いつもしている」の6件法，②これから先のこと（理想）について，「まったくしたくない」から「いつもしたい」の6件法で回答を求めた。①②については，同様の質問紙である。

c）BDI

BDIは，ベックらによって開発され（Beck et al., 1961;1979），林ら（1988a;1991）によって日本

Table1. 対象者

対象者		年齢	学生	性別	診　断　名	参加時期
1	A	22	社会人	男	なし	H9～H14
2	B	20	専門学校2年生	男	学習障害	H12～H18.3
3	C	20	社会人	男	精神発達遅滞	H14.1～H21.3
4	D	19	専門学校3年生	男	なし	
5	E	19	社会人	男	ADHD・アスペルガー	H9.10～H11.10
6	F	18	高校3年生	男	広汎性発達障害	H10.9～H16.3
7	G	18	高校3年生	男	アスペルガー症候群	H15.11～H21.3
8	H	17	高校3年生	男	なし	H15～H20.3
9	I	17	高校2年生	男	なし	H17～H22.3
10	J	17	高校	男	なし	H14.4～H20.3
11	K	17	高校2年生	女	なし	H15～H18.3
12	L	16	高校1年生	男	LD, アスペルガー症候群	H12～H19.3
13	M	16	高校1年生	男	言語　発達障害	H18.7～H22.3
14	N	16	高校1年生	男	なし	H15～H17.3
15	O	16	高校1年生	男	なし	H13.9～H20.3
16	P	15	高校1年生	女	なし	H22.3まで
17	Q	15	中学3年生	男	なし	
18	R	15	高校1年生	女	高機能自閉症	H18.9～H22.3
19	S	15	高校1年生	男	自閉症	H16～H22.3
20	T	14	中学3年生	女	なし	H18.9～H22.3
21	U	14	中学2年生	男	アスペルガー症候群	H18.2～H20.7
22	V	14	中学3年生	男	なし	H12～H13
23	W	13	中学1年生	女	なし	H13.9～H22.3
24	X	13	中学1年生	男	なし	H19～H21.9
25	Y	13	中学1年生	男	なし	H20.1～H22.3
26	Z	12	小学6年生	男	高機能広汎性発達障害（高機能自閉症）	H18.12～H21.5

語版が作成されている。最近の1週間における抑うつ状態の重症度を測定する自己記入型尺度であり，21の主要な抑うつ症状から構成されている。また，うつ病精神科診断基準では症状の持続を2週間以上としており，抑うつの重症度の観点からすると，より軽度の抑うつ状態を広く評価し得る尺度である。以下，尺度の項目番号に対応した測定内容を示す。(1) 抑うつ気分，(2) ペシミズム，(3) 失敗感，(4) 満足感の欠如，(5) 罪悪感，(6) 受罰の予期，(7) 自己嫌悪，(8) 自己非難，(9) 自殺願望，(10)涙もろい，(11)いらだち易い，(12) 対人的興味の減退，(13) 決断困難，(14) 身体像の歪み，(15) 活動困難，(16) 不眠，(17) 易疲労感，(18) 食欲の減退，(19) 体重減少，(20) 身体へのとらわれ，(21) 性欲の減退。21項目の総合得点は0 ～63点の範囲で分布し，高得点ほど抑うつ重要度が高いことを示す。

d）青年用適応感尺度

青年用適応感尺度（大久保, 2005）（5件法）（19項目）

「居心地の良さの感覚」「課題・目的の存在」「被信頼感・受容感」「劣等感のなさ」からなる。環境と個人との適合度から適応感を測るもの。日常の考え方や気持ちに関して，「まったくあてはまらない」から「とてもあてはまる」までの5件法で尋ねた。

e）CBCL

CBCL/4-18（Achenbach, 1991）は社会的能力尺度と問題行動尺度から構成されており，社会的能力尺度は，子どもの趣味や友達関係，家族関係など生活状況，問題行動尺度は118の質問項目と書きこみ可能な1項目から構成されている。これらの質問により評価される症状群尺度は，「ひきこもり」，「身体的訴え」，「不安／抑うつ」，「社会性の問題」，「思考の問題」，「注意の問題」，「非行的行動」，「攻撃的行動」の8つの軸からなり，さらに「ひきこもり」，「身体的訴え」，「不安／抑うつ」からなる内向尺度，「非行的行動」と「攻撃的行動」からなる外的尺度と総得点がある。これらの得点は標準化されたT得点に換算され，66点以上を境界域，その下は正常域，70点以上は臨床域と評価される。これらの結果から，子どもの情緒面及び行動面の発達や問題の特徴を一目で包括的につかむことができ，さらに対象年齢がひろいことから追跡調査によるその子どもの変化を観察することが可能とされている。

3．結果

友人関係認識尺度の平均値を基準として，対象者を友人関係認識高群と友人関係認識低群にわけ各尺度との関連について検討した。

(1) 友人関係認識尺度とBDIとの関連

友人関係認識2群とBDIの各項目に関し，t検定により平均の差の検定を行った（Table2）。

検定の結果，BDIの「将来」（t (24) =1.90, p <.05),「自殺」（t (24) =2.39, p <.05),「関心」（t (24) =2.85, p <.01),「性」（t (24) =1.10, p <.05）において友人関係認識高群が友人関係認識低群に対し有意に高い得点を示していた。また，「憂鬱」（t (22.45) =1.80, p <.10),「努力」（t (24) =1.82, p <.10）において，友人関係高群が友人関係低群に対し有意に高い得点の傾向にあることが示された。

(2) 友人関係認識尺度とKISSとの関連

友人関係認識2群とKISSに関し，t検定により平均の差の検定を行った（Table3）。

検定の結果, KISS（t (19.95) = -2.82, p <.01）において友人関係認識高群が友人関係認識低群に対し有意に低い得点を示していた。

(3) 友人関係認識尺度とCBCLとの関連

友人関係認識2群とCBCLの各項目に関し，t検定により平均の差の検定を行った（Table4）。

検定の結果,「思考の問題」（t (16.80) =2.32, p <.10）において友人関係認識高群が友人関係認識低群に対し有意に高い得点を示していた。

(4) 友人関係認識尺度と適応感との関連

友人関係認識２群と適応感の各項目に関し，t検定により平均の差の検定を行った（Table5）。

Table2. 友人関係認識尺度によるBDI t検定

	友人関係認識	N	平均値	標準偏差	t値	
1. 憂鬱	低群	11	1.82	0.75	1.80	†
	高群	15	1.27	0.80		
2. 将来	低群	11	2.09	1.22	1.90	**
	高群	15	1.33	0.82		
3. 失敗	低群	11	2.36	1.12	1.09	
	高群	15	1.93	0.80		
4. 満足	低群	11	2.09	1.04	1.42	
	高群	15	1.53	0.92		
5. 罪	低群	11	2.36	1.03	1.80	
	高群	15	1.80	0.56		
6. 罰	低群	11	1.73	0.79	0.20	
	高群	15	1.67	0.72		
7. 失望	低群	11	1.73	1.01	0.72	
	高群	15	1.47	0.74		
8. 責める	低群	11	2.27	0.90	0.56	
	高群	15	2.07	0.96		
9. 自殺	低群	11	2.00	1.00	2.39	**
	高群	15	1.20	0.56		
10. 泣く	低群	11	1.27	0.65	0.26	
	高群	15	1.20	0.77		
11. イライラ	低群	11	2.00	0.77	0.42	
	高群	15	1.87	0.83		
12. 関心	低群	11	1.82	0.98	2.85	*
	高群	15	1.07	0.26		
13. 決断	低群	11	2.09	1.04	0.55	
	高群	15	1.87	0.99		
14. 魅力	低群	11	2.09	1.04	0.50	
	高群	15	1.87	1.25		
15. 努力	低群	11	2.09	1.14	1.82	†
	高群	15	1.40	0.63		
16. 睡眠	低群	11	1.36	0.50	0.12	
	高群	15	1.33	0.82		
17. 疲れ	低群	11	1.82	0.75	0.91	
	高群	15	1.53	0.83		
18. 食欲	低群	11	1.45	0.93	0.80	
	高群	15	1.20	0.56		
19. やせた	低群	11	1.00	.000a	0.95	
	高群	15	1.00	.000a		
20. 健康	低群	11	1.45	0.52	2.06	
	高群	15	1.27	0.46		
21. 性	低群	10	2.40	1.51	1.10	**
	高群	14	1.36	0.63		

*p＜.01，**p＜.05，†p＜.10

Table3. 友人関係認識尺度によるKISS t検定

	友人関係認識	N	平均値	標準偏差	t値	
KISS	低群	11.00	42.55	11.33	-2.82	*
	高群	15.00	54.60	9.94		

*p＜. 01，**p＜. 05，†p＜. 10

Table4. 友人関係認識尺度によるCBCL t検定

	友人関係認識	N	平均値	標準偏差	t値
引きこもり	低群	11	65.00	7.67	.738
	高群	14	62.57	8.75	
身体的訴え	低群	11	57.55	9.21	.468
	高群	14	56.00	6.67	
不安／抑うつ	低群	11	66.36	8.33	1.029
	高群	14	62.93	8.22	
社会性の問題	低群	11	67.91	5.82	1.145
	高群	14	65.07	6.55	
思考の問題	低群	11	64.55	12.26	2.321 †
	高群	13	54.15	9.11	
注意の問題	低群	11	63.91	4.95	.242
	高群	14	63.29	7.85	
非行的行動	低群	11	58.18	6.65	-.655
	高群	14	60.29	9.40	
攻撃的行動	低群	11	61.00	4.69	.375
	高群	14	60.07	7.61	
内向尺度	低群	11	66.36	6.76	1.227
	高群	14	62.71	8.11	
外向尺度	低群	11	60.91	4.28	.323
	高群	13	60.00	9.36	
総得点	低群	11	66.91	4.48	1.098
	高群	14	64.00	8.53	

*p＜.01，**p＜.05，†p＜.10

Table5. 友人関係認識尺度による適応感 t検定

	友人関係認識	N	平均値	標準偏差	t値	
居心地の良さの感覚	低群	11	2.80	0.87	-3.154	**
	高群	15	3.82	0.74		
課題・目的の存在	低群	11	3.16	1.11	-2.450	*
	高群	15	3.99	0.62		
被信頼感・受容感	低群	11	2.33	0.88	-3.951	**
	高群	15	3.53	0.58		
劣等感のなさ	低群	11	2.52	0.90	-1.803	†
	高群	15	3.14	0.85		
適応合計	低群	11	10.81	3.29	-3.305	**
	高群	15	14.49	1.98		

*p＜.01，**p＜.05，†p＜.10

検定の結果，「居心地の良さの感覚」（t (19.43) = -3.15, p ＜.05）「課題・目的の存在」（t (24) = -2.45, p ＜.01）「被信頼感・受容感」（t (16.30) = -3.95, p ＜.05）において友人関係認識高群が友人関係認識低群に対し有意に高い得点を示していた。また，「劣等感のなさ」（t (21) = -1.80, p ＜.10）において，友人関係高群が友人関係低群に対し有意に高い得点の傾向にあることが示された。

4．考察

1）友人関係認識尺度とBDIとの関連

現在の友人関係に対してネガティブな認識を持っている発達障害児・者は抑うつを測る尺度であるBDIの下位項目の中の「憂鬱」「将来」「自殺」「関心」「努力」「性」に関する項目が有意に高いという結果が得られた。

知的な機能の遅れを伴った“従来の自閉症”の状態像とは異なり，高機能広汎性発達障害は正常発達からの認知面や言語発達での隔たりが少ない。したがって彼らは比較的通常の教育や社会に参加する機会は多いが，周囲からの理解や配慮がなければ二次障害を引き起こしやすいのが現状である（黒田，2004）。生活の中心が学校現場にある児童期においては，彼らの対人的な関わりの特異性や苦手さから，学級内でトラブルメイカーとして扱われる，いじめなどの被害的体験がある，逆に学級内では極力自己を抑えてふるまうといった子どもたちも少なくない。またそのような否定的な体験が積み重なることにより，暴力・性行為といった外向性の行為障害や，自傷行為・パニック・気分障害・不登校にみられる適応障害といった内向的な二次障害に結びつきやすいと言われている。

友人関係にネガティブな認識を持っている発達障害児は，対人的トラブルを日常的に感じており，二次障害に陥っている可能性があると考えられる。

2）友人関係認識尺度とKISSとの関連

現在の友人関係に対してネガティブな認識を持っている発達障害児・者は社会的スキルをどの程度自分が持っていると考えているかを測定する尺度であるKISSの得点においてネガティブな認識を持っていない群に比べ優位に得点が低いという結果が得られた。

思春期・青年期の人間関係は，家族から友人関係へと中心が移っていく。その中で，友人関係に対してネガティブに思っている発達障害児・者は，友人関係の築けなさに焦点が当たり，対人的な社会的スキルも低く認識すると考えられる。

3）友人関係認識尺度とCBCLとの関連

現在の友人関係に対してネガティブな認識を持っている発達障害児・者は行動面・情緒的な問題を測定するCBCLの「思考の問題」においてネガティブな認識を持っていない群に比べ優位に得点が高い傾向があるという結果が得られた。

友人関係がうまく行っている発達障害児は他者との交流を行うことで，自らの多様性に気づき混乱していることが考えられるが，このことは思春期・青年期において他者との中で自己理解を深めていく作業である。一方で，友人関係がうまく行っていない発達障害児は，自らの考えを固定化してしまい，柔軟に物事を考えることが難しくなっていると考えられる。「思考の問題」のように，考えがまとまらない・混乱しているという問題行動は，自己理解を深めていく中で通るべき道である。他者との関係を持っている発達障害児は特に他者との違いについて思い悩み一旦混乱する作業を行う。そのことを，親が評価するCBCLの中では，本人たちの問題性として認識されているのではないかと考える。

4）友人関係認識尺度と適応感との関連

現在の友人関係に対してネガティブな認識を持っている発達障害児・者は現在の自己の適応感について，どのように認識しているかを測定する適応感尺度の下位尺度の得点全てにおいて，ネガティブな認識を持っていない群に比べ有意に得点が低いという結果が得られた。大久保（2005）でも友人との関係が適応感に関して影響を与えている。

友人関係が，生活の中心となる思春期青年期において，友人関係がうまくいっていないと感じていることは，そのまま学校生活の中での不適応感につながる。Birch & Ladd（1996）も，「子どもの仲間集団からの受容は教室の社会的ネットワークにどれだけ子どもが適合しているかの指標である」と述べている。

5．まとめ

本研究では，集団心理療法「もくもくグループ」の卒業生における予後を検討するために，友人関係の認識という視点から精神的健康度と問題行動について検討した。

その結果，友人関係に関してネガティブな認識を持っている発達障害児の精神健康度の低さと友人関係に関してポジティブな認識を持っている発達障害児の自己のゆらぎについて検討をしていった。

「同性の仲間集団に帰属し，遊び，親密で理想化された友情を強く求めている。しかし，現実には，学校を中心とした日常場面ではそうした関係を築くことはたやすくない。そうした実状を子供たち自身が意識し，劣等感や不適応感を意識している」という発達障害児において，居場所の提供や劣等感，自尊心の低下への援助をしていく「もくもくグループ」の中で，いったんは友人関係に対しポジティブな印象をもったとしてもその後，友人関係に関しネガティブな印象をもった場合，精神的健康度は低くなる。そのため，卒業後に関しても友人関係に関し難しさを感じた場合に対応できるグループの設置が必要ではないかと考える。

友人関係に対しポジティブな認識をもっている発達障害児に関しても，対人的交流の中で自己のゆらぎを感じている場合は，個別の面接等の中でフォローしていくことが必要であろう。現在，九州大学総合臨床心理センターでは卒業生のうち個別的な面接につながることが多く，後者に関するフォローはなされている。

青年期に対しても対応できるような新たなグループの設置や多機関との連携により卒業後の友人関係に対応していくことが望まれる。

引用文献

S.Birch and G.Ladd (1997)：The teacher-child relationship and children's early school adjustment. *Journal of School Psychology*, 35, 61-80.

加藤　厚（1983）：大学生における同一性の諸相とその構造．教育心理学研究，31（4），292-302.

大久保・加藤（2005）：青年における個人―環境の適合の良さの仮説の検証．教育心理学研究，53（3），368-380.

大久保　智生（2005）：青年の学校への適応感とその規定要因―青年用適応感尺度の作成と学校別の検討―．教育心理学研究，53（3），307-319.

中島　俊思（2009）：対人相互交渉に消極的な小学校高学年軽度発達障害児へのグループセラピー．九州大学総合臨床心理センター紀要，第1号，89-106.

針塚　進・遠矢　浩一（2006）：軽度発達障害児のためのグループセラピー．ナカニシヤ出版

（受理：2012年3月31日）

Examination of "MOKUMOKU Group" group psychotherapy for children with developmental disabilities
— Study of prognosis for group participants —

Masakazu FUJINO, Sakito TANAKA
Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University
Koichi TOYA, Susumu HARIZUKA
Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

In this study, we conducted a follow-up study of children and adults to an object that has been participating in the activity group psychotherapy. Then, we examined the relationship between social competence and behavior problems of children by parents and mental health status, degree of adaptation skills and social relationships with friends today. As a result, the high group recognition friendship is significantly higher score was shown for the low group recognition in the context of relationships with friends and BDI perceived scale relationships with friends. In addition, the high group recognition friendship has been shown that for low group scored significantly lower in relation to the recognition friendship KISS perceived scale and relationships with friends. Furthermore, a high group recognizes that relationships with friends scored significantly higher for the low group was shown to recognize relationships with friends in the "problem of thinking." They have a positive impression for the friend relationship by the group. However, mental health become low if they have a negative impression regarding relationships with friends afterwards. Therefore, when they feel difficult relationships with friends, there is a need to set up the group to be able to respond.

Keywords: developmental disabilities, convalescence, relationships with friends, mental health